柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話:070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 125 号

多摩丘陵に残る
義経の面影 - 2

史話が残されていない？（2）

麻生観光協会理事　麻生歴史観光ガイドの会 名誉会長　松本良樹

前回、義経に関する伝承・伝説が全く残っていないとお話ししましたが、考察してみるに、天下を騒がせた大罪人として義経に味方する人々は居なかったのでしょうか？『吾妻鏡』は鎌倉幕府の正式歴史書と言われていますが、この古文書が完成したのは、義経が逝去して約80年程後の北条氏によって作られたもので、北条氏に都合の悪いものは削られてしまったと考えられるのです。

しかし、吾妻鏡の中で一つだけ義経に関する記事が掲載されています。それは、鶴岡八幡宮の上棟式で馬の手綱を取り、引き廻したという記事です。頼朝は弟としてよりも一人の御家人だと言う事を、他の御家人たちに徹底させたかったのかも知れません。これも北条氏の策謀でしょうか？

ところが、東京側の武蔵野台地から多摩川越しに見る多摩丘陵は、通称“多摩の横山”と万葉時代から呼ばれており、この多摩丘陵に源義経（1159～1189）にまつわる伝承・伝説（史話）がなんと多い事か！それも黄瀬川で兄頼朝と涙の対面を果たした 21 歳の時から、木曽義仲を攻略するため鎌倉を出立する 24 歳までの 3 年間、鎌倉に居住して平家追討の手段を考えていたと思われますが、鎌倉にいても都の状況は何もつかめません。武蔵国の国府があった府中を中心に、多摩丘陵をはじめ、この地を精力的に歩き廻り平家の戦力、人脈、天皇・公卿たちとのつながり等を調べていたのではないかと想像されるのです。国府には都とかかわりのある人々の往来も多く、情報入手には事欠かないと思うのです。

府中市からの多摩丘陵遠望　右端は丹沢の大山　（ウィキペディアから転載）

義経四天王のひとりとされる亀井六郎重清が上麻生の月読神社近くに館を構えていたと伝承されています。義経の周りに登場する武蔵坊弁慶と亀井六郎重清は紀州の人であり、紀州 熊野神社の御師や熊野の修験者・武士たちが、義経を陰から支え、助けていたと思われるのです。亀井六郎重清（もとは鈴木姓）は紀伊国の豪族 藤白鈴木氏の一族、または近江源氏佐々木氏の出とする二つの説がありますが、これについてはいずれメスを入れて詳しく述べたいと思っています。

なぜか、この多摩丘陵の麻生区柿生地区には鈴木姓を名乗る方が非常に多いのには驚きです。次回からは、この地に残る義経史話をご紹介していきたいと思います。

ご考までに、この地で歌われていた盆踊り歌 義経音頭を掲載させていただきます。

義 経 音 頭　歌:藤堂輝明　演奏:コロムビア・オーケストラ　作詞:岩田道之輔　作曲:市川昭介

1　母と別れて　牛若丸は
鞍馬山にて　修行つみ
源氏再興　ただ一筋に
天狗相手に　腕みがく
腕みがく

2　京の五条の　大橋の上
暴れ弁慶　こらしめて
主従許した　牛若丸は
捲土重来　爪をとぐ
爪をとぐ

3　いざや出陣　時こそいたれ
めざす敵陣　一の谷
平家自慢の　ひよどり越えを
奇襲手なれた　逆おとし
逆おとし

4　あわてふためく　平家の船と
雌雄決せん　壇の浦
見事義経　八艘飛びの
秘術尽くして　大勝利
大勝利

5　風よ吹け吹け　試練の嵐
渡る世間に　佛在り
富樫情けの　安宅の関で
嘘と誠の　勧進帳
勧進帳

6　夢ははるばる　大空駆ける
天馬翔（はばた）く　青い空
明日の希望に　命を燃やす
響く義経　大音声
大音声

（つづく）

シリーズ
「麻生の歴史を探る」　第95話

水 争 い

小島　一也（遺稿）

向原の弁財天

稲作を中心とする当時の農業にとって、水は水田の生命で、古くから農民はこの潅漑用水の取得に苦労を重ね、市内では多摩川流域の二ヶ領用水や大丸用水は世に知られますが、谷戸田の多い丘陵部のこの地方には、この地方なりの用水取得の努力がありました。

このことを新編武蔵風土記稿で見ると、「わき出ずる清水を用い、用水の便悪ければ、雨水をたたえて耕に備う、故に旱損の患あり」と各村共通の特性を記しています。雨水をたたえて耕に備うとは溜池のことで、これを数えると、上麻生村には5ヶ所、早野村に7ヶ所、王禅寺村に7ヶ所、下麻生村、栗木村に2か所、その他細山村や黒川村には溜井と呼ぶところがあります。現在この溜池は、早野の七つ池、白山のむじなが池、下麻生の籠口の池にその面影を残し、栗木の鳶（とんび）池公園には、その跡碑を残し、金程「向原の池」跡には、文政十一年（1828）建立の池の守り神「弁財天」像が今も保存されています。

一方、谷戸からの湧き水は、早野川、真福寺川、麻生川、片平川、三沢川（黒川）、五反田川（高石）となって流域に耕地を造り出し、これを豊穣の上田としています。川の流れを堰き止めて、灌漑用水としているのが「堰」で、片平川は「7堰」で知られていますが、どの川にも2～3の堰があったようです。

麻生区内で一番広い耕地は麻生川流域の8町8反（8.8ヘクタール）の白根耕地（現水処理センター、麻生病院）で、これへの潅漑は上麻生村か片平村に要請して、片平川末流に熊野堰を造り取水をしていました。区内で一番大きな堰は、上麻生の東林寺下の麻生川を堰き止めて取水口を設けた「東林寺堰」で、大ヶ谷戸から仲村、亀井、そして下麻生村早野境まで幅約2m、延長1,500m。川底の浅い真福寺川を水路（途場と呼ばれた）で越す珍しい用水路で、隣村三輪村農民の耕地を含め、約25ヘクタールの潅漑をしていました。

「水は天からのもらい物」「降れば洪水、晴れれば渇水」。溜池でも取水堰でも自然相手の水の取得は「我田引水」とあるように、いつの時代、どの地域でも水争いがあったようです。それを規制したのが村（組合）の取り決めでした。自分の田に水を引くには番水制と分水制があり、番水制とは一定の時間を設けての取水で、分水制とは取得する水の分量をまく種の播種量（1斗まきがほぼ１反歩相応）によって取り決めたと言われ、長い間に培われてきた地域連帯の農民生活が“恒例”という生活の知恵を生み、多少の不満はあっても、長年の伝来（しきたり）がこれを抑えていたようです。

元文三年（1738）上鉄村、中鉄村、下鉄村、大場村、市ヶ尾村（現横浜青葉区）の5ヶ村が、下麻生村を相手取って幕府の奉行所に訴えを起こしています。鶴見川本流域は古代から豊穣の耕地で、時代ははっきりしませんが、上流の下麻生村に下麻生堰（現恩廻公園）が設けられていました。この堰から取水された用水路は早野村を経て5ヶ村を通り、川和村の境まで全長6km余り、幅2mの水路で、50ヘクタールの水田を潅漑するものでした。事の起こりは元文三年その堰が流失。5ヶ村は早速その復元にかかりますが、下麻生村とその対岸の三輪村から異議が出て紛争となるわけですが、下麻生・三輪村の主張は、「堰を作るなら今まで通りの蛇籠（蛇の胴のような竹籠に石を詰めたもの）を川底に埋めるものにしてほしい」。5ヶ村側は「杭を打って安定させたい」の主張で、結局は5ヶ村側の「農民の死活の問題」としての訴えに、奉行所は杭打ちを認めての落着となります。下麻生村としては、堰の存在は洪水などを起こし、迷惑で堀敷料もあり、村と村との駆け引きであったかもしれません。

恩廻公園（鶴見川の旧流路にあたる）

文化五年（1808）この堀敷料（水路料）を巡って下鉄村と早野村の間に争いが起きています。毎年下鉄村は、早野村を通る用水の費用（堀敷料）として一石八斗八升四合を支払っていましたが、この年は凶作で免除してくれ、の要望に早野村が拒否した紛争で、他の4ヶ村は明らかではなく、これも村と村との関係で、結局は早野村の領守富永氏に一任したとされています。その後この下麻生堰（寺家堰ともいう）は、文政七年（1824）取水口が崩壊、5ヶ村と下麻生村は協議書を取り交わし、昭和32年（1957）旧5ヶ村と神奈川県が鉄筋コンクリート堰とし、昭和48年（1973）鶴見川改修によって今は全く姿を消しています。

参考資料:「横浜青葉区史」「ふるさとは語る（柿生郷土史刊行会）」「歩け歩こう麻生の里」「川崎市史」「新編武蔵風土記稿」

シリーズ
教育の歩み 第１部

学校の誕生と成長（13）

小林 基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆マントノン夫人と女子教育◆

太陽王と崇められたルイ14世が発した王令（前号参照）ですから、各地の大司教や司教は、時折各地からの報告を求めます。こうした報告書の類が結構残っているのですが、修道院や教区教会の運営する幼年学校の訪問記は、ほぼ例外なく、「子どもたちは歌うように読む」と記しています。皆さんは漢文や古文を暗誦してくるようにという宿題に悩まされた経験はありませんか？　一方で、好きな曲の歌詞は、どんなに長くても苦もなくすぐに覚えられた経験も…。歌うように節をつけると、どういうわけか覚えやすいのですね。古代の語り部たちも、吟遊詩人たちも、長い伝説や物語を朗詠したのは、節をつけることで覚え易く忘れ難くしていたからなのです。

「歌うように読む」というのは、読みを習う第一段階にあることを示しており、その段階から少しも進歩していないことを示しています。これが幼年学校、即ち初等教育の現実だったのです。先ずは、子供よりも先生を鍛えなければならないというのが、現実だったのです。この点の改革には、相当な時間がかかります。

この点の改革を、先ずは女子教育の推進の観点から、積極的に推し進めた功労者が、ルイ14世の最後の愛人で、正夫人の死後、王と秘密裏に結婚したことが今では明らかにされているマントノン夫人です。彼女の略歴を記しましょう。彼女フランソワーズ・ドービニェは10歳で孤児となり、姪の行末を案じた伯母の計らいで教育を受けることができたのです。その教育のおかげで、彼女は16歳で詩人のスカロンに出会い、気に入られて翌年17歳で、25歳年上のスカロンの妻となりました。こうした年の差婚は当時は当たり前のように多かったのです。スカロンは、妻となったフランソワーズの美貌と才気を愛し、自らの詩作を筆写させると共に、当時名作とされた書物を次々に読むことを奨めたのです。

マントノン侯爵夫人
：フランソワーズ・ドービニェ

こうしてフランソワーズは、修道院の学校で得た知識などとは比較にならない高い教育を、夫のスカロンの勧めと励ましで身につけることが出来たのです。スカロンに連れられて出席したサロンで、錚々たる知識人たちとの会話を楽しむ術も、いつしか身につけていったのです。しかし好事魔多し、彼女が25歳の時に、スカロンは病を得て、あっけなく亡くなります。未亡人としてつましい生活を送るようになった彼女に、サロンの友人たちの口添えで、ルイ14世と当時の愛妾モンテスパン夫人との間に出来た庶子たちの、家庭教師のクチが舞い込んだのです。彼女は、この王子たちを慈しみ、なつかれ、とても良く教育したのです。その様子はいつしかルイ14世の知るところとなり、いつしか彼女はヴェルサイユ宮殿に住みこむことを許され、国王の子どもたち全ての教育を受け持つようになります。子どもたちを慈しむ彼女の行動を高く評価した国王は、彼女にマントノン侯爵夫人の称号を贈ったのです。

中年の域に達した国王にとって、質素で慎ましやかなマントノン夫人は、今までの数多くの愛人とは、全く異なるタイプの女性でした。83年の王妃の死後、いつの頃からか、王は彼女を溺愛するようになります。権勢の絶頂にあるルイ14世の寵愛を受け、「望みは欲しいままに…」と言われながら、夫人が王に所望したのは、かつての我が身のように、貧しいが家柄の正しい娘たちに教育を授けるための資金援助だけだったのです。彼女自身が、我が身の幸運を振り返る時、それが自分の受けた教育の力であることを、身に染みて感じていたからです。

サン・シール校の授業風景

貧しいが意欲のある娘たちを、善く教育する事が大切であることを、彼女は良く知っていたのです。1680年代中頃から、彼女は色々な女子教育の試みに、資金援助をし始めたのですが、遂にはサン・シールに土地を買い、その地に女子の寄宿学校を建てたのです。やがて、1715年に国王が亡くなると、自分もサン・シールに移り住み、寮生たちと生活を共にするようになります。夫人にとってサン・シール校は、修道女の養成校ではなく、やがて結婚し家庭を切り盛りし、我が子たちを立派に教育する母親たちを育てる学校であり、同時に女子の幼年学校で、立派に先生を務めることが出来る女性を育てる学校だったのです。

◆18 世紀フランスの場合◆

17世紀末に、男性で 28％、女性で 14％とされた識字率は、18世紀末のフランス革命期には男性 48％、女性26％まで拡大しています。「教区に最低一つの学校を」という王令の効果は、確かにあったと言ってよさそうです。ただこの変化を別の角度から見ると、北部の識字率は比較的高く、南部は低いという結果が出てきます。王権の浸透度が南部地域ではまだ弱かったことが読み取れます。また都市と農村を比べると、農村の識字率は都市に比べると、男女とも 50％に満たないことが分かります。都市では、職人層の間でも、読み書き能力を身につけることへの欲求が高まっていたのです。

（続く）

平成30年度 柿生郷土史料館友の会 法人会員紹介 49法人（順不同・敬称略）

本年度の柿生郷土史料館「友の会」の法人会員の皆様をご紹介いたします。
当館の活動を支えていただき、深く感謝いたします。（平成30年8月31日現在）

★㈲青戸建材★(学)川崎青葉幼稚園(麻生学園)★㈱あかもと本舗★㈲アクティブ
★医療法人社団総生会麻生病院★㈲麻生自動車★㈱朝日ホーム★㈱飛鳥典禮★㈲荒川電気工事
★(福)柿生アルナ園★㈱エムケープリント★王禅寺★柿生保育園★㈲柿生恒産★(学)柿の実幼稚園
★㈲かもしださんぎょう(まきば)★川崎信用金庫柿生支店★㈱観財★㈱北島工務店★㈲広東商事
★㈲孝友商事★琴平神社★サイトー農芸★栄運輸㈱★㈲白百合商事★㈲志田電気製作所★常安寺
★㈲ステップオン★誠和産業㈱★セレサ川崎柿生支店★㈱タカミ★たま日吉台病院★月読神社
★㈱ティエムコーポレーション★(学)桐光学園★㈱とん鈴★長瀬土地家屋調査事務所★奈良工業
★中華料理 福永★㈱富士建材★プライマリー㈱★喫茶ベル★㈲まつや★㈲山義産業
★㈲ユーコーポレーション★リック設計企画㈲★㈱ルシル★小料理わかば★和光大学

柿生郷土史料館催物案内 【入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日　（原則として月4回）
10月　6・20・27日（毎土曜日）　**11月**　4・18・25日（毎日曜日）
◎開館時間:午前10時～午後3時　（10月13日、11月11日は休館です）

第15回 特別企画展　新聞記事に見る大正から昭和へ

平成天皇の譲位を来年に控えた今、大正天皇の崩御による昭和天皇の即位を当時の新聞はどのように報じたか。そこでは、国民の受け止め方や諸外国の反応は、どのように捕えられていたのか、当時の新聞記事や写真を展示します。記事に目を通しながら、皆様お1人お1人、ご自由にお考えいただけたらと、考えております。

期間　9月2日（日）～12月22日（土）　会場　柿生郷土史料館特別展示室

柿生郷土史料館友の会 第9回史跡見学バスの旅　武蔵の国の古代を訪ねて さきたま古墳群と吉見百穴

日　　時　：　2018年11月1日（木）
主な見学先　：　さきたま古墳群と史跡博物館
吉見の百穴
松山城跡

募集人員　：　先着44名
集　　合　：　午前7時45分　新百合丘駅北口
解　　散　：　午後6時30分頃（新百合丘駅北口→柿生駅付近）
費　　用　：　7,700円
申し込み　：　往復はがきに必要事項を記入の上、柿生郷土史料館まで
必要事項　：　参加者全員の郵便番号、住所、氏名、年齢、連絡先電話番号
送 付 先　：　215-0021　川崎市麻生区上麻生6-40-1　柿生中学校内　柿生郷土史料館
（お近くの史料館支援委員にお渡しいただいても結構です）
申込締切　：　10月20日（土）
問合せ先　：　小林基男　（080-5513-5154または044-989-0622）